

観光と地域社会に関する研究 (註1)

A Study on Tourism and the Community

大西 一成
OHNISHI Kazushige

はじめに

1995年、菅沼・相倉合掌造りの集落が世界遺産に登録された。古来より受け継がれてきた変わらぬ人々の身近な日々の暮らしに世界からの視線が向けられた。合掌造りはもとより、神社、土蔵など伝統を色濃く残す集落である。中部山岳地帯、庄川沿いで、長い歴史を経てきた変わらぬ人々の暮らしの場が、世界の遺産とし受け継がれることになった。

世界遺産への登録によって、文化継承のためにどのような努力が注がれているのかを問うことは、人類の遺産を後世に受け継がせていく上で重要な課題であると考えられる。五箇山における世界遺産指定が、人々の暮らしにどのような変化をもたらしたかについて検証を試みる。

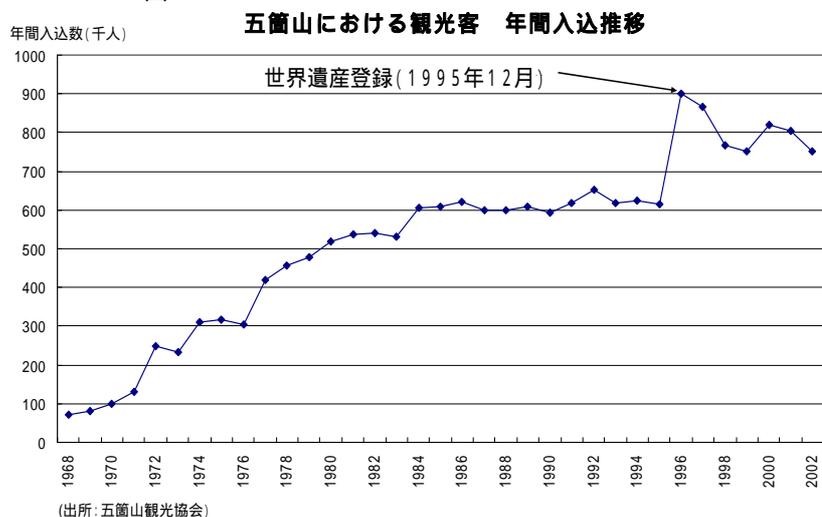
上平村が平成17年度に発表した『第五次 上平村総合計画』によると、少子高齢化はもとより、産業構造さらには住民の意識等について詳細な分析が見られ、世界遺産を抱える地方のあり方を模索している姿が読み取れる。観光と生活空間としての村落あり方について検証がさらに進められようとしている。豊かな自然と歴史的遺産を保持し、その中で村落における住民の生活をいかに守っていくのが問われている。こうした取組みは、五箇山にのみならず多くの地域社会に当てはまる課題といえよう。地域経済の求められる活性化という視点を背景に、果たしてどのような取組みが可能なのかを考察したい。

(註1)本稿は2005年3月に発行した「平成16年度 (富山県高等教育振興財団私立大学振興事業(研究活性化事業)助成金報告書 Part2 世界遺産、五箇山国際観光についての研究)における論文に対し、加筆修正及び更なる考察を加え発展させたものである。

観光事業の姿～五箇山観光客の動向(年間入込数)～

五箇山への観光客の入込数は、世界遺産の指定を受けた1995年の翌年から顕著に拡大している。問題は指定を受けた後の趨勢が減少傾向にあることであろう。50万人で推移していたそれ以前と比べ、増減の波が大きくなっている点が指摘されよう。もっとも、1998年は日本経済がマイナス成長となるなど、観光分野においても厳しい状況があったものと予想される。また、夏場から冬場にか

図1



けて伸びが大きいことも特徴といえる。このように、入込数で見ると、明らかに五箇山への関心が高まったといえる。むしろ、そうした関心の高さをいかにして堅持していくのが課題といえよう。

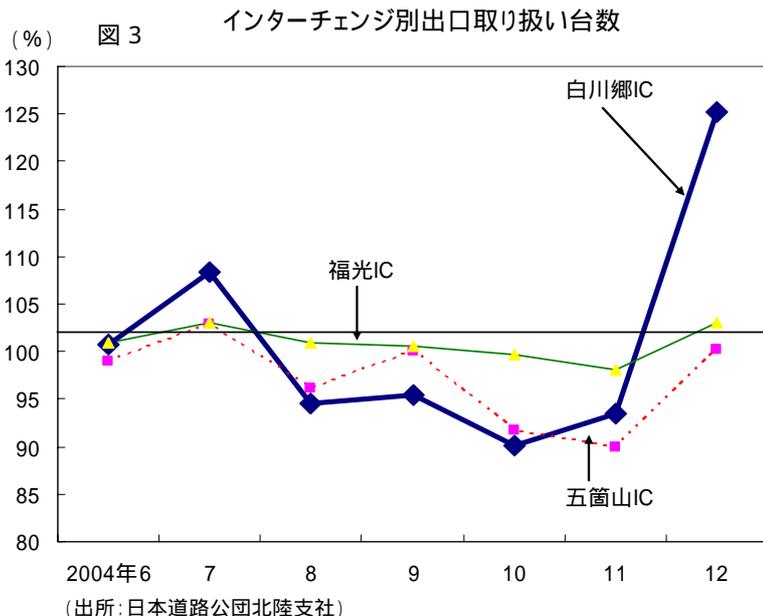
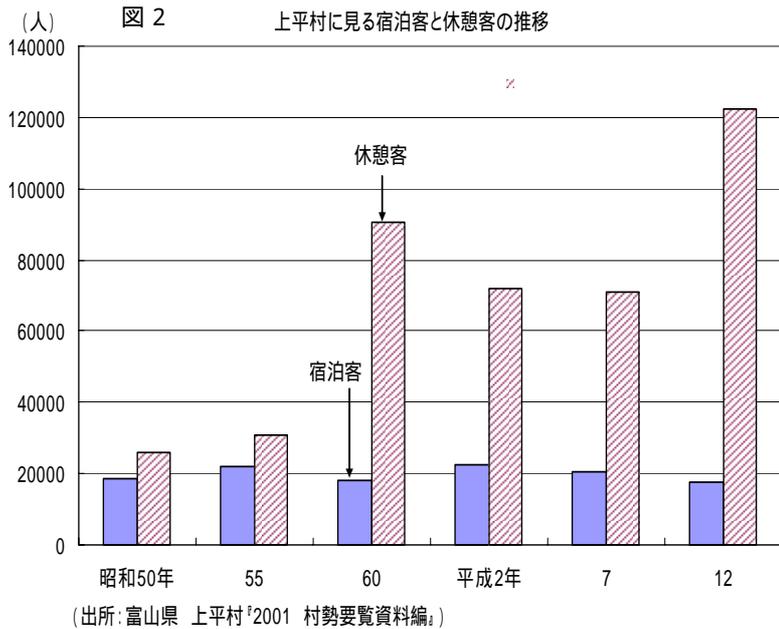
交通機関の利便性を高めること、春先の入込数をいかに獲得するか、あるいは各種イベントをどのように広報するのが問われる。こうした、活動を広めることで、五箇山の維持が可能となろう。文化と環境を失うことなくこうした目的を達成するには、行政面からの支援が必要であろう。財政的にいかに資源配分を行うかが安定的な世界遺産の維持管理を可能にするのではないかと。

・ 観光における問題点～伸び悩む宿泊客、拡大する休憩客～

世界遺産への登録後も宿泊客が伸び悩む一方、休憩客は拡大している。この背景には、平成 12 年に東海北陸自動車道・五箇山 IC の利用が可能になったことに伴って、交通面の利便性が高まったことから、必ずしも宿泊の必要が無くなったことや、環境客の趣向の変化も要因として挙げられよう。こうした、交通網の整備は、顕著に休憩客の拡大をもたらしており、その効果に関する判断は難しい。ただ、宿泊客が安定的に推移する限り、こうした休憩客の増加は望ましいといえよう。観光客の嗜好を睨んだ対応が求められよう。

上平村を例に採ると、県内はもとより、北陸 3 県からの来訪者が約 67% を占めることから、今後いかにして県外からの環境客を動員できるかも、観光地としての今後を左右しよう。もとより集落全体の努力が求められるものの、交通期間の整備、広報などより広範な行政の支援も必要であろう。

例えば、東海北陸道の全線開通は、中京地区からの観光客を呼び込むのに大きく寄与しよう。少なくとも休憩客での拡大は見込めるものと考えられる。また、観光地として、他の地域との関連性を深めることにもなり、あらたな観光戦略にも繋がる可能性を高めることにもなる。平村における行政面からの取り組みを見ても、



観光の振興に注力している姿が読み取れる。あくまでも歴史的な文化の保全・継承を背景としている。自然、農林水産業への取り組みは、新たな課題とするまでもない様子も見られる。郷土色をいかに歴史的文化に踏まえて具体的に振興していくかが問われている。

事業総括表によれば、まずは村民の住環境が重視されている。観光に繋がる「四季を感じるふるさとの魅力づくり」は20%で、その内訳は以下のようにになっている。

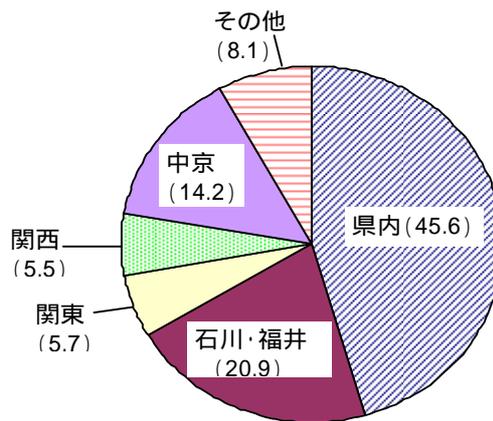
また、各観光施設の有機的な関連性を高めることも不可欠であろう。温泉、スキー場、歴史民族館など横の繋がりを強化し、いずれの目的で訪れる観光客に対しても、多方面からアプローチできることが、客層の拡大をもたらすことになる。

・ **世界遺産登録と地域文化の振興計画**

世界遺産登録に伴う地域文化財の管理・保護への高い意欲が伺われる。重要なことは、こうした計画を、推進し維持する人材の育成と確保が可能であるかという点であろう。文化財への深い造詣に裏打ちされた高い保護への意欲を有する人材の育成は時間を要する事業でもあることから、長期的な計画の推進が望まれる。

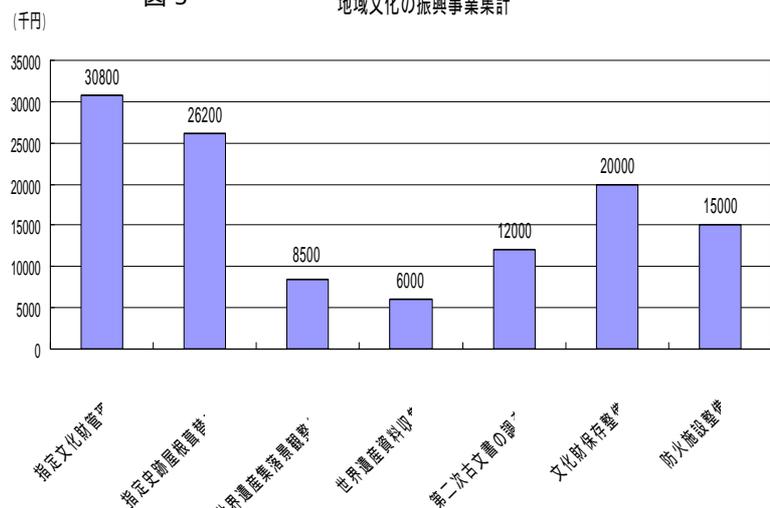
問題は、近隣県からの観光客の比率は横ばいながら、県内の比率が延びた反面、遠方からの観光客の比率が低下している。このことは、宿泊客の伸び悩みにも見られるように既に顕在化して久しい。こうした状況の背景としては、やはり観光地としての情報発信が届いていない可能性あろう。施策としては、既に立案されているが、インフラの整備、人材の育成が急がれる。将来の高速道路の開通に伴うインフラのあり方も検討されるべき課題である。交通網の整備は、観光客の流動性を高めることに繋がり、必ずしも観光客が宿泊するなど、長時間の滞在に繋がるかどうかは不確定である。こうしたことから、観光客の行動パターンをもにらんだ他地域をも結んだ有機的な施策が望まれるのではないかと。魅力ある観光資源の保持と、集客という課題にとっていかなる具体的な施策があるのかを検討したい。

図4 観光客の入込先別内訳



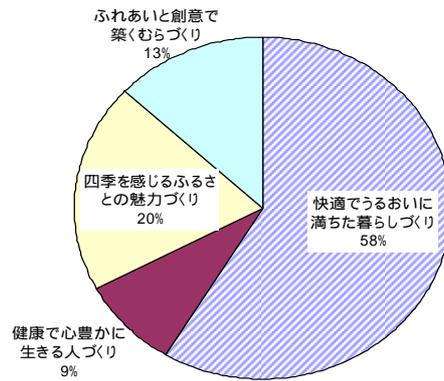
(出所:富山県 上平村『2001 村勢要覧資料編』)

図5 地域文化の振興事業集計



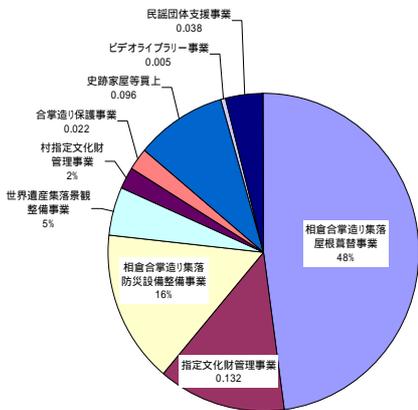
(出所:富山県 上平村(平成13年3月)『第4次 上平村総合計画書(第4期実施計画画編)』、数値は平成13年度から平成16年度までの合計額。)

図 6 事業総括表



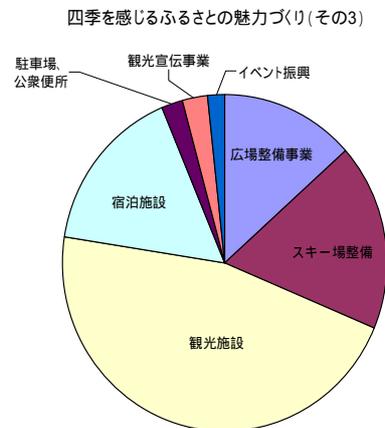
(出所: 富山県 平村(平成14年度3月)『新世紀たいら総合計画実施計画(平成14年度～平成16年度)』)

図 7 四季を感じるふるさとの魅力づくり(その1)



(出所: 富山県 平村(平成14年度3月)『新世紀たいら総合計画実施計画(平成14年度～平成16年度)』)

図 8 四季を感じるふるさとの魅力づくり(その3)

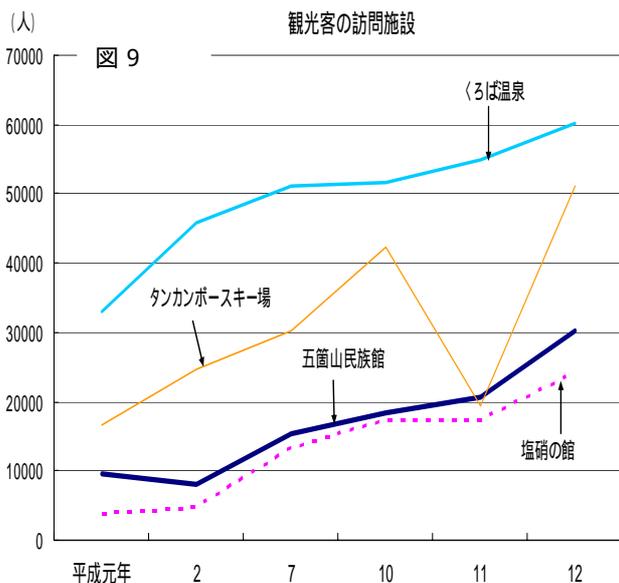


(出所: 富山県 平村(平成14年度3月)『新世紀たいら総合計画実施計画(平成14年度～平成16年度)』、(その1)と(その3)の符号は基資料による。)

上平村に見る観光への施策

上記のデータにも見られるように、これまでも多くの施策が行われている。今後はこうしたこれまでの施策に基づいた新たな施策としてどのようなものがあるのかが検討されなければならない。『第五次 上平村総合計画』でも指摘しているように、情報発信の充実はその要となろう。観光情報に関し、インターネットはもとより、観光業者、交通機関との連携も求められる。こうした情報網と機関を通して、求められる施策のあり方が検討される必要がある。

宿泊客に比べ、休憩客の近年の急速な伸びは評価されるものの、今後の観光に対するあり方を再検討する必要があるのではないかと。それは、単に宿泊客の拡大を図るのではなく、むしろ休憩客の



(出所: 富山県 上平村『2001 村勢要覧資料編』)

伸びをいかに維持し、一方でリピーターを拡大することによって宿泊客の拡大へとつなげることも考えられる。つまり、再訪あるいは、新たな目的を生む多様性あるいは多層的な観光地に脱皮することも考えられよう。観光地としてのみならず、旧来の伝統を内包する生活の場である五箇山にはそのことが可能なのではないか。宿泊する体験を通して、五箇山が守り通してきた生活のあり方を伝えることが可能となろう。世界遺産であり、今も尚、生活の場であることの意味を伝えることこそ価値があるのではないか。

果たして世界遺産に対する関心を喚起するとともに、集客を高めるための施策も試みられようとしている。集客のためのインフラ整備はもとより、観光事業を推進できる人材の育成、PRのあり方にいたるまでの計画を立案している。

・ **観光産業の育成～観光と産業～**

観光が中心であるものの、他産業特として観光に繋がりがやすい、あるいは観光を支える商業の可能性は検討に値しよう。上平村における推移は必ずしも芳しいものではないが、新たな取組みとしては観光産業との更なる連携が求められよう。また、五箇山に固有の物産の育成と、これまたマスメディアやインターネット等の情報媒体を利用した広報活動の活性化や、イベントの開催等が求められよう。商店数は平成11年に18店舗から19店舗になったのみで、大きな変化はみられない。この店舗数においては、商品販売額が大きく変動することが予想されるも、平成14年の従業員の拡大にもかかわらず、また休憩客の堅調な伸びにもかかわらず大きな落ち込みとなったことは見直されるべき点があるのかもしれない。

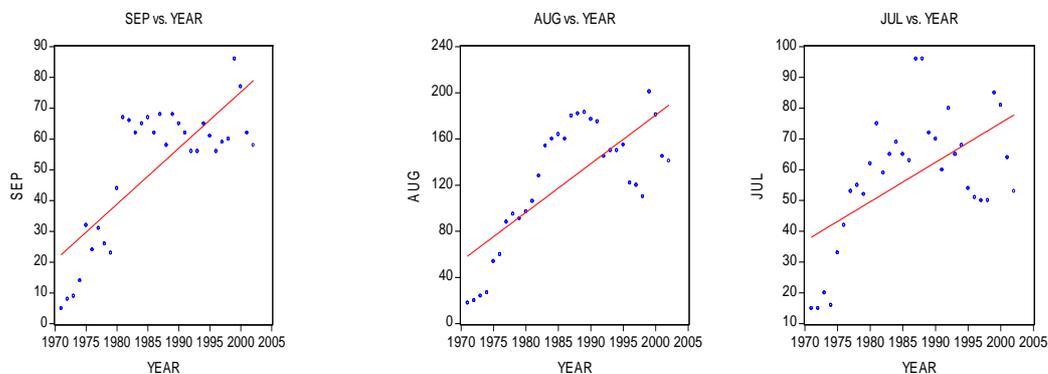
いずれにしても観光収入源としての柱となる物産の育成が求められる。ともすれば一律化しやすい観光物産において、五箇山独自のものを生み出すことは可能であろう。若年層も巻き込んだ商業開発が急がれる。若年層が中心となった地域社会の活性化や村興しといったケースは多いのではないか。上平村の総合計画書も言及しているように、五箇山が守り続けてきたものの何に観光客が求めるものがあるのかは大いに検討に値するものであろう。

・ **34年間にける月別動向からみた要因分析～オールシーズン型に向け課題となる夏季の集客力の上昇**

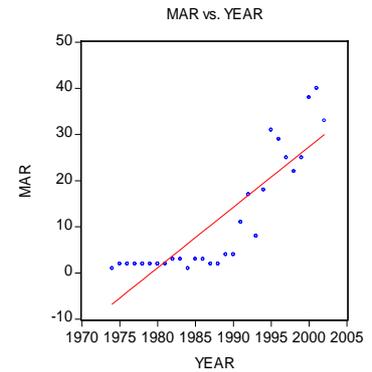
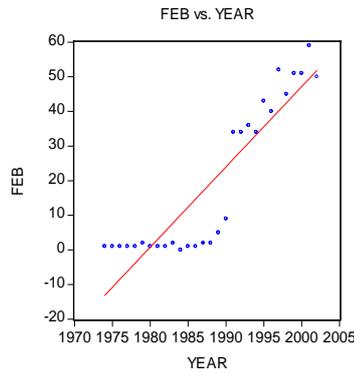
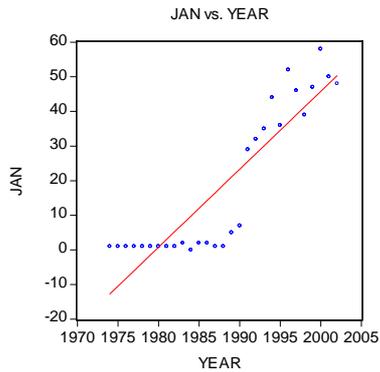
95年を堺とした上昇傾向の鈍化についての四半期別分析を行なってみた。34年間のデータに基づき回帰分析を行い、その季節的要因を求めてみた。その結果、極めて明瞭な傾向が浮かび上がってきた。1～3月期の集客はトレンドを上回っている。一方、大きく落ち込むのは7～9月期の入込数である。こうした状況は、9月やや回復の兆しがあるものの夏季における厳しい状況にあることは否めない。逆に、1995年以前はむしろ1月～3月期が低迷していたことも特徴として挙げられる。

図 1 0

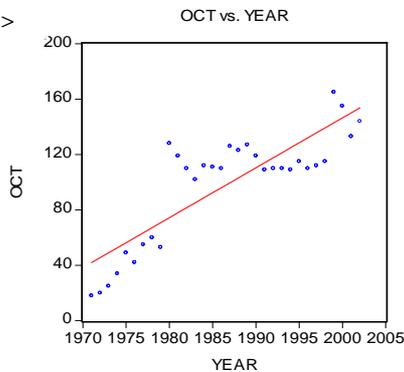
<夏季>



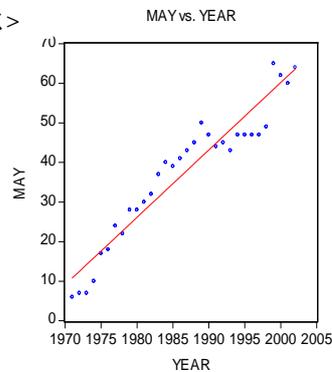
<冬季>



<春>



<秋>



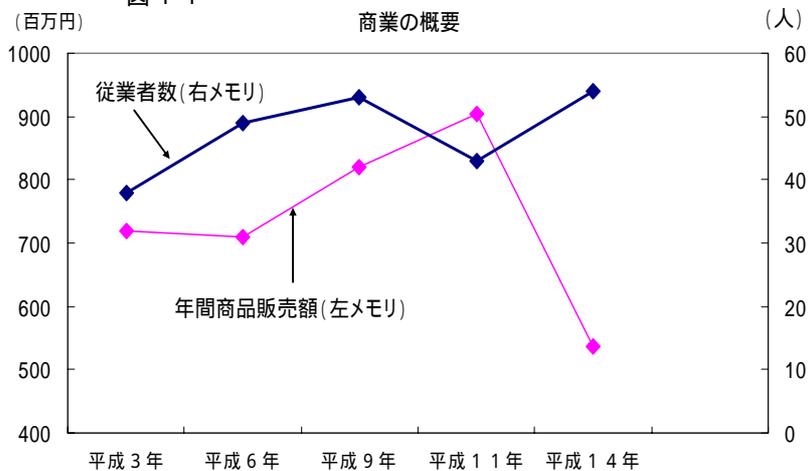
(出所: データの出所はいずれも五箇山観)

また、春と秋のシーズンは、当初落ち込みは見られるもののその度合いは小さく、近年における盛り返しが顕著である。こうした背景には、集客に向けた戦略が作用しているのではないかと考えられる。夏季における集落のイメージが希薄とも考えられ、この点に関する新たな取組みが集客力の減少傾向に歯止めをかけることになるのではないかと。季節を問わず集落の暮らしのあり方を示していくことが観光産業の基盤作りに重要であろう。(注: 回帰分析に伴う記述統計量は註3に記載)

・ 五箇山に見る地域社会の問題点 ~ 全国平均を上回る高齢化率 ~

少子高齢化の波には、五箇山にも押し寄せている。上平村でこそ若干の伸びが見られるものの、高齢化の波は新たな対応を迫っている。観光地としてのみでなく、伝統ある村落の生活様式を受け継いでいく人材の育成は以下にすれば可能なのか重要な課題であろう。そのためにも若年層を中心とした活動が求め

図 1 1



(出所: 上平村(2005)『第五次 上平村総合計画』)

られるのではないかと。各種イベント、物産、ネットワーク作りは、若年層に可能なのではないかと。

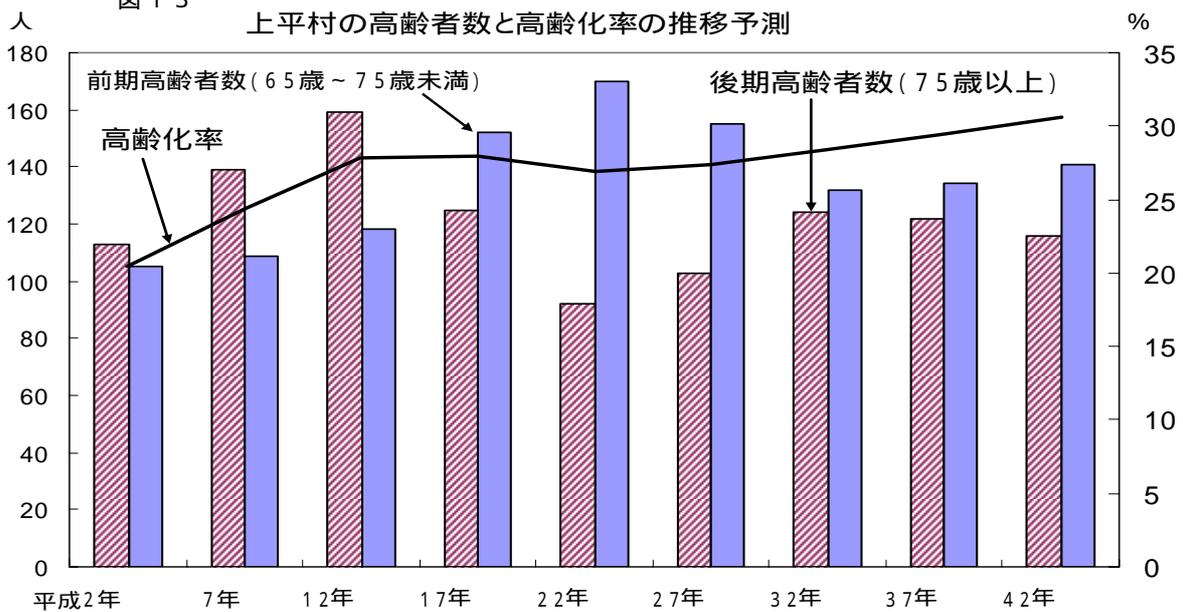
今後、五箇山の文化財の保護を支える人材の育成にとって、大きな課題は若年層への対応であろう。高齢化の進展は、人材の流出もあり全国平均 22.5 人（2010 年予想、出所：国立社会保障・人口問題研究所）よりも高くなっている。こうした状況は、現時点における若年層への働きかけに支障をきたすと共に、将来的な計画策定を担う人材の不在を意味することから、いかに若年層の確保、あるいは育成するかが課題であろう。いずれにしても、現時点で高齢化比率は全国水準を上回っている。高齢化する集落において、伝統的な文化を失うことなく、後世に継承していくのが大きな課題となるのではないかと。

伝統文化の外部への発信の結果として、多くの人々が訪れることが可能となり、そのことが人口の減少に悩む集落の活性化をもたらすのではいかと期待される。集落はもとより、人々の生活の場であることから、従来型の観光地化については疑問が残るのではないかと。ここにいう、活性化とはいかなる集落のあり方なのか検証されるべきであろう。高齢者人口の高い村ほど人口の減少著しい結果となっている。若年層の人材の流出がこうした結果を招いているものと見られ、対策が望まれる。

高齢者人口の割合

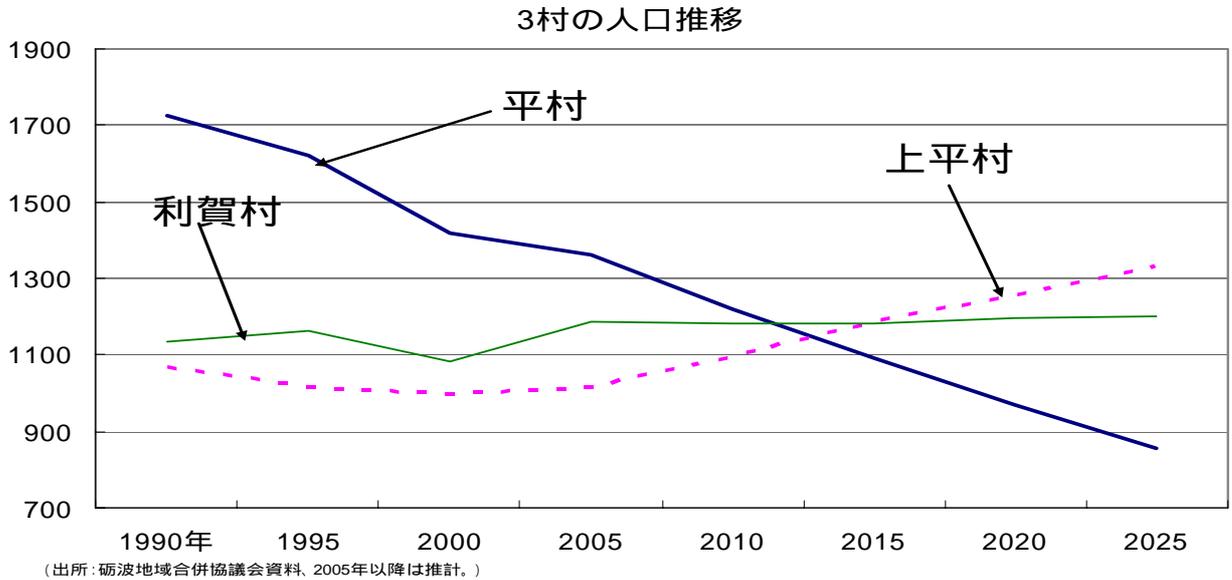


図 1 3 上平村の高齢者数と高齢化率の推移予測



(出所：上平村(2005)『第5次 上平村総合計画』)

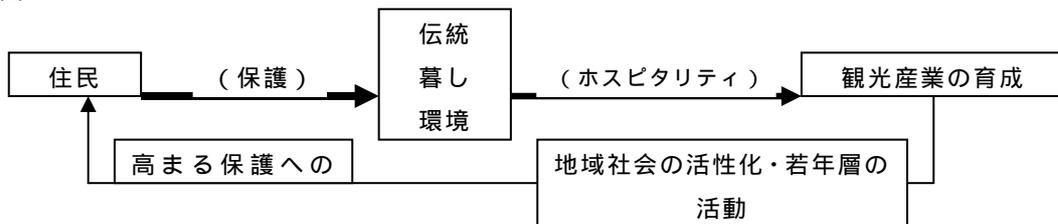
(人) 図 1 4



・ 求められる暮らし、環境そして観光との融合

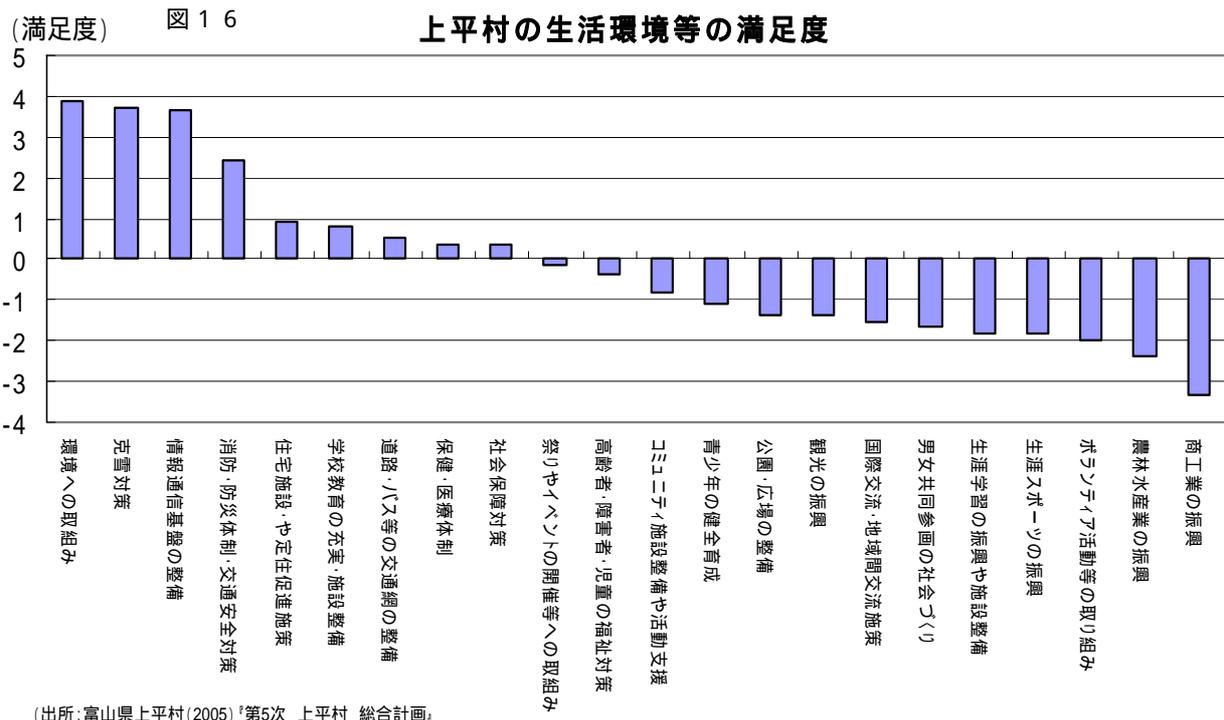
五箇山に見る地方経済に求められる地域社会の活性化は、受け継がれてきた暮らし、環境そしてそれを活かした商工業の活性化であろう。観光とはその商工業の一つに過ぎない。住民は、環境や自然災害、住環境への対策を評価しており、今後の対策として求めているのは産業面、特に商工業の振興である。観光、国際交流等も高くなく、世界遺産登録を契機とした一層の取組みが求められる。もっとも、こうした地域社会における商工業は、伝統的な住民の暮らしと環境に密接に関係しており、いわばそうした財産を生かすことで、おのずと観光等に結びつく産業の芽が潜在的に存在するものとする。そうした暮らしと環境を優先したかたちこそ、集客力の源泉ではないか。でなければ、画一的な観光産業に陥る可能性もある。

図 1 5



重要なことは、暮らしや環境を度外視した政策は無く、またそうした政策は、集客力の低下に繋がりがねないことであろう。地域社会は、伝統に育まれた文化と暮らしのあり方が何ものにも換えがたい財産である。五箇山における世界遺産登録も、そこにおける暮らしのあり方そのものが世界の財産として認められたといえよう。観光が商業として成立しているのは、環境の保護が行われている地域が極めて多い。また、逆に観光によるダメージを回避し、上図のように保護への意識の高まりをもたらし好循環を生むものとする。こうした循環における施策の特徴は、外的な要素が希薄である点にある。つまり外部からの導入がない点にある。観光産業と住民の暮らしは密接に繋がっており、いわばそうした個性化こそが観光産業として成立させている。

また深刻な問題である少子高齢化は地域社会でも例外でなく、むしろ深刻でさえある。地域社会における人口減少に対して、「...人を地域で生活する住民としてとらえ、さらには人々が生活する生存空間を重視する見方



こそが重要だということだ。...」(松谷・藤正 2002 p203)との視点が極めて重要であることを五箇山の実態は示している。また、上平村が発表した『第5次 上平村 総合計画』では、高齢者を支える地域概念図では、地域住民と組織、地域ぐるみのサークルを提示している。

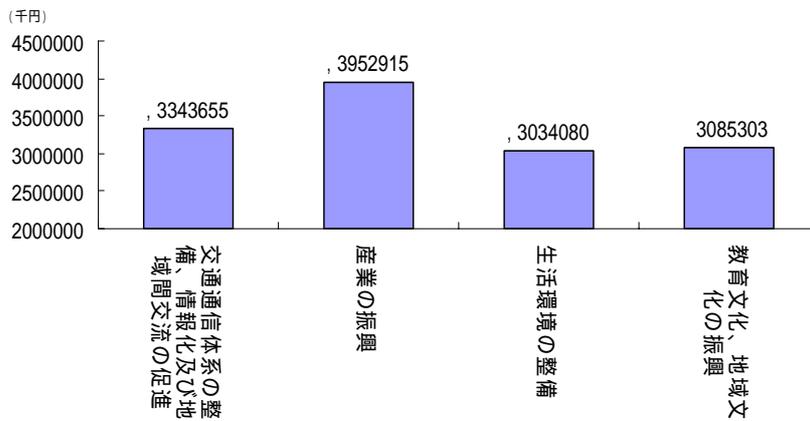
世界遺産としての誇りと暮らしの場である地域社会を、5つの「将来像達成のための基本目標」として掲げている。自然環境の保全・生活環境の整備、産業・観光の振興、保健・医療・福祉の充実、教育・文化・生涯学習の振興、住民参加・コミュニティの5項目である。これにより、観光資源である集落の伝統的な生活文化を高め、ホスピタリティーの提供を可能ならしめると見られる。また、将来像として同『第5次 上平村 総合計画』では、「感交を提供するわたしたちの歓幸地づくり」と題し、より分かりやすい概念として、風俗、風味、風景、風物と「風」を中心とした村づくりの方向性を示している。こうした施策の成果を見るには時間を要するものと見られる。しかし、住民の暮らしを中心軸においたビジョンのあり方は、今後地域社会の活性化に向けた一つの明確な政策を示していると考えられる。

・ 今後の課題～課題を残す財源問題～

いかなる政策にも財源問題が深く関わってくることは否めない。本来、財源は赤字であっても理論的には返済可能である限り問題があるとは言えない。インフラ整備に関わる財源は将来に社会資本整備という形で財産を残すこともあり起債による財源調達は原則、問題がないといえるだろう。ただ、負担問題については明確な考え方が確立されているとは言えない面もあり、議論の余地を残している。地域経済におけるこうした負担と便益に関する問題は、次第に地方主体の考え方が台頭しつつあるが、財源力の弱い地方公共団体にとってみれば、財源の確保に新たな施策を確立するために少なからぬ時間が必要とも考えられる。財源問題は、まさに今後の地域社会の活性化に向けた大きな課題である。富山県上平村(2005)『第5次 上平村総合計画』に見る財源内訳は、そうした課題を提起しているように思われる。真の自立に向けた地域社会の活動は始まったばかりではないかと考える。

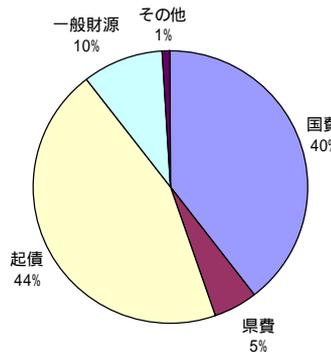
図 1 7

富山県上平村 第五次実施計画における主要事業総括表



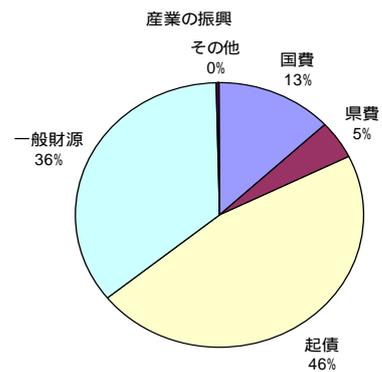
(出所:富山県上平村(2005)『第五次 上平村総合計画』)

3 図 1 8 業、情報化及び地域間交流の促進



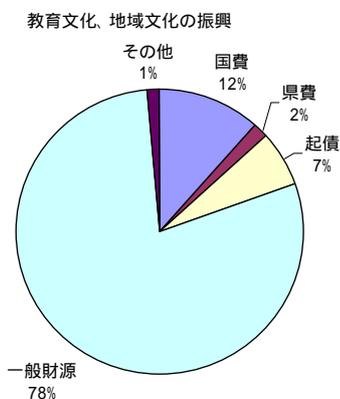
(出所:富山県上平村(2005)『第五次 上平村総合計画』)

図 1 9



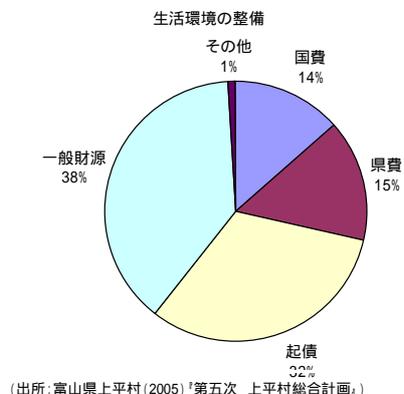
(出所:富山県上平村(2005)『第五次 上平村総合計画』)

図 2 0



(出所:富山県上平村(2005)『第五次 上平村総合計画』)

図 2 1



(出所:富山県上平村(2005)『第五次 上平村総合計画』)

・ まとめ

世界遺産への登録を契機とし、受け継がれてきた伝統的な文化財の保護の重要性が再認識されることが望まれる。また、五箇山は今尚、集落に居住する人々の生活の場でもあり、言わば生活環境としての保全も望まれる。失われること無く受け継がれてきたのは一重に、こうした住民の努力によるものである。そこに息づく生活への深い知恵を学ぶことも忘れてはならないだろう。訪れる多くの人々に、深い印象を刻み込むものは、そうした美しくも厳しい四季の中で営まれてきた変わらぬ生活の姿である。五箇山の最も重要な点の一つは、世界遺産あるいは観光の対象となるものが、人々の日々の生活として、今尚守られ続けられている伝統的な生活の様式にある。そこに五箇山の魅力があり、また人を招いてやまない魅力となっている。観光とは、人が訪れて止まない魅力を備えていることの証であり、そこに見落としてはならない伝統と文化に培われた人々の生活が人を引き付けて止まないののである。暮らしのあり方を守り、また求めていくことこそ、望ましい一つの地域社会の活性化のあり方を提示するものと考えらる。

[註2] 図2、図3、図4、図5、図6、図7、図8、図9、図11、図13は、2005年3月に発行した「平成16年度（富山県高等教育振興財団私立大学振興事業（研究活性化事業）助成金報告書 Part2 世界遺産、五箇山国際観光についての研究」における論文において掲載したものを再掲したものである。

[註3] 記述統計量

(注) 記述統計量は下記の定義に基づく。(松浦克己・コリン・マッケンジー 2001)

$$\text{Std. Dev (標準偏差)} \quad s = \sqrt{\frac{\sum_{i=1}^N (y_i - \bar{y})^2}{N-1}}$$

$$\text{Skewness (歪度)} \quad S = \frac{1}{N} \sum_{i=1}^N \left(\frac{y_i - \bar{y}}{\hat{\sigma}} \right)^3$$

$$\text{標準偏差の推定量} \quad \hat{\sigma} = s \sqrt{\frac{N-1}{N}}$$

$$\text{Kurtosis (尖度)} \quad K = \frac{1}{N} \sum_{i=1}^N \left(\frac{y_i - \bar{y}}{\hat{\sigma}} \right)^4$$

$$\text{Jarque-Bera} = \frac{N-k}{6} \left(s^2 + \frac{(K-3)^2}{4} \right)$$

	YEAR	January	February	March	May	July	August
Mean	1988	18.79310	19.34483	11.62069	37.21875	57.93750	123.8438
Median	1988	2	2	3	42	61	143
Maximum	2002	58	59	40	65	96	201
Minimum	1974	0	0	1	6	15	18
Std. Dev	8.514693	21.45990	21.87999	12.89633	16.69215	21.08652	53.31350
Skewness	-1.10E-16	0.532108	0.515354	0.947778	-0.361149	-0.495090	-0.682498
Kurtosis	1.797143	1.521850	1.506373	2.385429	2.330060	3.008221	2.380229
Jarque-Bera	1.748296	4.008621	3.979380	4.798083	1.294046	1.307365	2.996444
Probability	0.417217	0.134753	0.136738	0.090805	0.523602	0.520127	0.223527
Sum	57652.00	545	561	337	1191	1854	3963
Sum Sq.Dev.	2030.000	12894.76	13404.55	4656828	8637.469	13783.88	88112.22
Observations	29	29	29	29	32	32	32

	September	October
Mean	50.68750	97.81250
Median	59.5	110
Maximum	86	165
Minimum	5	18
Std. Dev	21.81216	40.15730
Skewness	-0.825914	-0.691251
Kurtosis	2.483675	2.398595
Jarque-Bera	3.993502	3.030663
Probability	0.135776	0.219735
Sum	1622	3130
Sum Sq.Dev.	14748.88	49990.88
Observations	32	32

(出所：五箇山観光協会)

(注) 使用 Software は「E Views5 version5.1」(開発元 Quantitative Micro Software 社(QMS) 販売代理店：株式会社ライトスーン)による。

《参考文献》

- (1) 富山県上平村
2000 『アルファビレッジ(やすらぎ村)構想 第4次 上平村総合計画』
- (2) 富山県上平村
2001 『第4次 上平村総合計画書(第4期実施計画編)』
- (3) 富山県上平村
2005 『第五次 上平村総合計画(開始年度平成17年度～目標年度平成26年度)』
- (4) 南砺市企画総務部情報政策室[編]
2005 『南砺市市政要覧 資料編』
- (5) 富山県上平村
2001 『村勢要覧 資料編』
- (6) 日本道路公団 北陸支社 『ハイウェイ情報 統計データ』
(<http://www.hokuriku.jhnet.go.jp/highway/data.html>)
- (7) 富山県平村
2002 『新世紀たいら総合計画(実施計画編)平成14年～平成16年』
- (8) 砺波地域市町村合併協議会
『市町村合併を考える 市町村合併の動き』
(<http://ex-johana.city.nanto.toyama.jp/home/gappei/gappei.htm>)
- (9) 神野直彦
2002 『地域再生の経済学』中公新書
- (10) 板倉理友
2005 『地域マクロ経済の分析』現代図書

- (11) 太田博史
2002 『地域・都市・交通分析のためのミクロ経済学』東洋経済新報社
- (12) 森棟公夫
1999 『プログレッシブ経済学シリーズ 計量経済学』東洋経済新報社
2005 『計量経済学』新世社
- (13) 松浦克己・コリン・マッケンジー
2001 『EViews による計量経済分析』東洋経済新報社
2005 『EViews による計量経済学入門』東洋経済新報社
- (14) 滝川好夫・前田洋樹
2004 『EViews で計量経済学入門』日本評論社
- (15) 蓑谷千鳳彦・野村俊朗・斎藤崇・大津泰介
2003 『数量経済分析シリーズ <第6巻> パソコンによる数量分析 [改訂版]』多賀出版
- (16) 室田泰弘・伊藤浩吉・越国麻知子
2005 『パソコンによる経済予測入門』東洋経済新報社
- (17) Mark. James
2004 “ *Tourism and the Economy* ” University of Hawai'i Press [滝口 治・藤井 大司郎監訳
『観光経済学入門』 日本評論社, 2005 年]
- (18) 松谷明彦・藤正巖
2002 『人口減少社会の設計』中公新書
- (19) 松谷明彦
2004 『「人口減少経済」の新しい公式』日本経済新聞社

